

## 記憶のなかの水平状態

藤 井 忠

一日を終え、枕に頭を横たえたが眠りはすぐには訪れそうになかった。そのとき突然、犬の噛み合いのような荒い殺気をともなって肉体がぶつかりあう音が外でした。無言で、殴るか取っ組み合っているらしいのだが、怒号などの前触れはなく、いきなりどすんと始まった。

すでに一時をまわっていた。殴り合いは、櫛の木立を隔てた道路で起きているはずだ。昼の暑さの名残に、樹木や草叢にひそむ虫たちの気配がまじった深夜の空気が音をこもらせて、安宿の襖のむこうであたりを気にして争っているような身近さを感じさせる。普段なら少なくともベランダに出るぐらいのことはする。しかしその夜、私は寝たまま暗闇のなかで音を聞いていた。纏れあう音は地面をこするようにして移動していく。押し殺した悲鳴が洩れ、やめてよという女の低く鋭い声のあと、哀れっぽく謝る少年らしい若い男性の声がした。揉みあう肉体がもう一度、重く響いて、音はふっと消えた。静まると、何事もなかったかのようだ。仲間うちのもめごとというより家庭の出来事らしく胸に迫るものがあつたが、あっけない感じもする。しかし肉体どうしが発する荒々しい音は、音として、非行為・非関与の水平状態を保ってじっと聞いている当方の心臓に直接響いてきており、それからあとは眠られぬ夏の夜になってしまった。

数日前に翻訳の再校が送られてきて、暑さのなかでゲラを見ながら毎日暮らしているので、横になってからもどうしてもそのことへと思いが向かう。

ユダヤ系作家マネス・シュベルバーの自伝である。1905年、オーストリア・ハンガリー帝国の北のはずれガリチアの小さな町に、ラビの息子として生まれた。第一次世界大戦中に戦火を逃れて一家とともにウィーンに移り住む。それからベルリンへ行き、ナチの政権

獲得後、亡命生活に入る。最後はパリに住み、六十歳を過ぎて自伝を書き始めた。1984年に没するまで、二十世紀のさまざまな場面を体験し、長篇・短篇・エッセイなどを書いていて、そのような時代のなかの歩みを描いた自伝は、三巻からなる。シュベルバーを以前から熱心に読んできている友人の提案で翻訳の話が軌道にのり、二人で分担し、私は前半のガリチアとウィーン時代を訳出することになった。

当時のユダヤ人の子がそうであるように、三歳のときからヘブライ語がすらすら読めるように勉強し、モーセの五書の、定められた章の文を訳す訓練をし、また暗記する。彼は記憶すること、忘れないこと——文中には「記憶という宗教」という言葉が出てくる——を徹底して身につけていた。老いを意識する作家は、遠い過去の細部を思い起す。あるいはおのずと浮かび上がる何気ない情景を手繰り寄せる。蘇ってくる光景を彼はひき止め、じっと眺める。一人の幼い子供がそこにいて、彼にかかわってくる人たちがいる。ある出来事が起き、それを見ている一人の少年がいる。彼らと彼との関係を思い、心理を分析し動機を探る。公正であらんと絶えず細かく気を配りながら事柄を反復して、あれは何であったかと隠されたものに目を向け、それでもなおかつ疑問を疑問として残していく。

だが屈折にみちた追憶の粘りは、叙述の表面を辿っていくときよりも、ある事柄を想起しているときに他のことが挿入され、いったんその道筋が切れたかに見えるような場合に示される。テーマは消えたのではなかった。ひそかに持続していたのである。再びそれがやや姿を変えて現われるとき、終わったかと思われていたことが、実はしばらく潜行していたのであることを読み手は知る。

例えば冒頭の、幼年時代の光景。最も古い思い出は、雪景色と結びついている、と彼ははじめにいう。しか

し、その雪の思い出を押しおけるようにしてまず蘇ってくるのは、春の、ライラックの花が咲き匂う風景である。

ライラックの花が咲く垣根をはさんで、時折、ユダヤ人の子供は、隣のポーランド人の少女と会っていた。その名は、ヤチャ。たがいに異なった言葉で話していた。この短い出会いの追憶は初恋の物語かと思われるが、しかし主題は、死であった。

ある日、幼い彼は、両親には内緒で女中に導かれてヤチャの家に行き、そこで、白い衣服をまとって死の床に横たわる彼女を見る。死者の胸には十字架が置かれていた。ユダヤ人の男の子は、当然のように、死者の前に跪くよう促される。幼い彼は、はっとして、とっさにそこを逃れる。

主題は死であった。ヤチャの死はさらに、溺死し河原に寝かされた見知らぬ青年の死体への思い出を呼び起こすのであるから。しかし死そのもののゆえにヤチャの死が描かれたのだろうか。垣根をはさんで会ったヤチャと、死の床に横たわるヤチャの違いに、幼児である彼の眼は向けられるが、さらに別のことがかかわってくることにより、それは彼にとって一つの意味をもった体験として描かれるのである。

いま私は暗闇のなかでその情景を思い浮かべてみる。まだ五歳にならぬユダヤ人の男の子が両親に内緒でキリスト教徒の家へ行き、死の儀式を見る。彼らの呟く祈りの声が周囲にみちているが、彼は一人だ。背の高い金髪の女が鳥の目のような目で彼を上から厳しく見つめ（その目は生涯忘れられぬものとなる）、彼を連れてきた女中が彼に跪くように彼の身体を引っ張る。ユダヤ教徒がキリスト教徒の家で十字架の前に跪くことを強制されているという、由々しき事態に自分が直面しているのを男の子は直感した。彼はいま死を見たが、彼にとって死と同じくらい、死よりもなお由々しいことを、罪への誘惑を、感じとったのだった。

シュペルバーは、幼いユダヤ人の信仰を奪わんとするものの存在をその瞬間体験したがゆえに、追憶の最初にそれを書く。雪の思い出を押し退けてその情景がまず彼のもとに浮かび上がったのである。信仰を奪おうとするものは、その後、さまざまの形で彼の前に現われるであろう。その最初の体験であった。

脳裏に浮かび上がる、それぞれに独立した光景のほとんどすべてが、一つのものへと関係づけられていく。個々に異なった種々の事柄が想起されて合流していく。

「すべてはひとつとなる」のである。そしてその一つのものとは、彼の自我である、とあってよいであろう。

しかもその自我は、孤立してそこにあるものではない。ユダヤ教という、おそろしく古い、いわば「百科事典的な」伝統、すなわち、世界の創造と未来について壮大な観念の構造を組み立て、それに即して生活を細部にいたるまで規定し、項目ごとに種々の戒律・禁止を定めた伝統に、「強迫観念的に」結びつけられている者の、自我である。

過去が約束し予告したことをもって未来への希望が設定される。そのために、現在はたんなる通過点以外のものではないということになる。そういう時間の構造のなかにある、自我である。しかしその自我は、成長し、変化していく。

シュペルバーは幼くしてメシアの到来に疑いを抱き、ラビである父とは異なった道を歩む。が、しかし彼はその構造の外に出たであろうか。

こうして水平状態で諸々のことを思い直していると、自分が、何らかの、過去・現在・未来に関する観念構造のなかにはいるのではないことをしみじみと感じる。こうして横たわっている私には、時間は茫漠として節目のない、長い帯のような連なりであるように思われてくる。どのように意味づけすべきか分からぬ、意味づけを拒む、茫洋たる時間のなかで、この現在を感じる。いま私は、自分に我慢しているだけであるような気がする。耐えているだけの場所は、空気が静止しているようである。周囲がどれほど動いていようと。

この、ぬくぬくとした環境とはまるで異なるが、しかしまた辺境の風景においても時間は停止してはいなかったか。シュペルバー自身、そのようにあの辺境の小さな町を描いてはいないだろうか。

そこでは何かが、生が、剥出しになっている。想起され描かれるあのユダヤ人町のすべてに、貧しさがしみこんでいた。貧しさは、生存の根本的な姿を示していた。そしてその貧しい生を表現するのは肉体であった。かしがった低い家々と同じく、貧困と空腹に歪んだ肉体であった。

雨が降ると、道はたちまちぬかるみとなり、人がそこに沈んでしまうかもしれないほどになるが、冬になり、雪が降ると、町は、白一色に変わる。シュペルバーは、最も古い思い出には雪が結びついていると、最初に述べた。だが、追憶は別の道を進んで、ヤチャ

の死をまず描いた。しかしやがて叙述のなかで、雪は蘇る。雪の純潔は、宗教的倫理的な象徴として捉えられるのではない。思い出のなかで、純白の雪は、まさに「小さな町のすべてに浸透していた惨めさ、醜さと不潔」という現実とかかわっていたのである。「それらすべてが今、消え失せ、見えなくなっているのだった。町は美しかった。雪が町を包んでいた。」

雪に覆われた町の美しさを述べたあと、彼は、雪のない町の姿を、裸の貧しい町の姿をいよいよ詳細に語っていくのである。しかも叙述のそのきっかけは、一つの単語である。雪の思い出を書いて一日おいた朝、ある単語をめぐる彼は自分の心に引っ掛かるもののあることを感じる。先に自分が書いた「惨めさ」という言葉が気になっているのである。あの町の人間は「貧しく」はあったが、「惨め」であっただろうか、と。思い出に、思い出される事柄に、自分が公正ではなかったことを彼は問題とせざるをえないのである。こうして、あの町の裸の姿が思い出のなかに浮かび上がらせられていく。そして、腹をすかした人間の内部に、腹をすかし不幸になればなるほど激しく燃え立つ、メシア到来への希望が、彼らの貧しき日々の営みを描くなかで示されるのである。彼自身はそのときすでに、その希望に疑いを抱き始めていたにもかかわらず、その疑いはしかし、メシア到来への希望を燃やしつづき腹をかかえた者たちに、神が依然その約束の実行を控えているということに対して向けられていた。

翻訳用の原書には、いろいろの書込みがあって、かたわらに、ところどころ翻訳の日付が鉛筆で書いてある。あの頃、私はこんなことをしていたのかとも思うのだが、ある時期から日付が丹念に、ほとんど毎日のように記されている。しかしそれは、春のある日まで来て、はたと止まり、急に二か月ほど飛んで、また始まっている。しかしそのあと日付は前ほど念入りには書き込まれていない。一部分時間的間隔が大きくなっているのは、突然の入院のためで、いま校正をしながら原文を見なおしていくと、その発作の日がだんだん近づいてくるのが分かるのである。この暑さのなかだから身体には注意はしていても、疲れてくるとそういう日付が微妙に作用する。このような過去の痕跡は複雑な気分を呼び起こす。消しゴムで消してしまえばいいのだが、そうもいかない。

このことを書き出すと、当時の、またはそれ以前の

ことが、重苦しく蘇ってくるであろうし、その一部分は、昨年、この研究誌に随想の形で書き添えている。そしていままたそれにかかわろうとしているのだ。水平状態というのは、ベッドに釘づけになって過去をいやおうなく想起させられる刑罰みたいなものかもしれぬからその過程を辿るしかないにしても、体験の全体ではなく、ある同じ部分に固執しているのである。今回は、その前後のことへと少し事柄を広げることになるが、しかし同じところに執着していることには変わりはない。

あまり計画的ではない生活のなかで、ある時期に複数の仕事を並行して行なうのが習慣となっていた。翻訳を始めたその翌年、91年の春、長年従事していた独和辞典が出版された。出版が間近になったとき、この辞典に費やした歳月を確める必要が生じ、これに12年がかかったこと、さらにその辞書の前身となるものも含めるとそれにまた相当の年月が加わってくることを改めて知った。時とともに岸辺は消え、海を漂う状態となって、他に、私事においても、さまざまのことが起こり、何年続けているか分からなくなっていた。その間、辞書のことは人には黙っていた。出版上の事情もあるが、それだけではない。辞書執筆へのひそかな没頭は、シュベルバー風にいえば「秘密の飛び地」になっていたのである。それにまた、このような仕事は形をなさぬかぎりは外目には何もものでもないのであり、それに費やした歳月の重荷は、各自がひそかに負うしかないのであった。

しかし息の長い仕事の途中でしばしば起こるであろう、いつ完成するかは分からぬように思われる日々において、私はしばしばとめどもなく怠惰な時を体験した。辞書で埋まった机に向かえば、それでよいのであるが、ぼんやりと、たいていは水平状態のままあらぬ思いに耽るばかりだった。何日かして立ち上がり椅子に腰掛けると、語彙表のなかの単語はじっと待っていた。私のかたわらをさまざまの事柄が流れ過ぎていったのに、その単語だけが私を待っているのを重い気持ちで確認しつつ、綴りをまず紙に書く。それから小さな綴りのその語に何日か何週間か、あるいは一か月以上を費やして下書きをし、じぐざぐを重ねてようやく記述の仕方がきまると清書し、その語に別れを告げ、次の単語を記す。しかしいま思い浮かぶのは、なぜだか机に向かっているときの長い時間ではなく、書き終

えて暗闇に身体を横たえたときのこと、枕に頭を寝かせると、原稿用紙に清書されなかった事どももともに逆流してきて、一つの小さな綴りが渦巻き、時には奇怪な夢を生むのであった。

辞書が出たときにいただいた葉書の一つに、「こういう仕事をしたあとですから、ゆっくり半年はお休みなさい」と書かれてあり、年長の、辞書の労苦をよく承知されておられる方からのもので、胸にこたえた。しかし私はこの優しい助言に従わず、むしろ解放された勢いで翻訳に取り組んだ。最初は捗っていた。だがその年の夏休みになって、これからという時期に、急に集中力が減退し始め、どことなく気怠くぼんやりと日々を過ごしてしまったのは、やはりあの葉書のいうとおりであったかもしれない。肉体は無言であるが、突然、あるかたちで復讐するものらしく、あの倦怠の日々は、その予告であったのか、とこれもあとになって思ったが、しかし病気の予告ということについては、そう単純にきめつけぬほうがよいと追い追いかけていった。

入院中に、発作の原因について思い当ることを話したことがある。私よりずっと若い、いつも質問を受けてくれるその医師は、ちょっと首をかしげ、起きるときには起きるものですよ、と答えた。退院後、胸に小さな痛みを感じるのをそれを別の医師に訴えたとき、救命救急の部門に関与する壮年の紳士は、そのように外に現われるのは、たいてい大したことはなく、大事なことは見えないところで起きているのものです、とあっさり答えてくれた。

起きるときには起きる場所も、何か重大なことが起きる、見えないところも、その人の内部であることは、医者も患者も互いに自明のこととしている。しかし、「発作に襲われる」ということはどういうことなのか。

前触れなしに病気が「襲ってくる」ことについては、ヘシオドスが『仕事と日』において、パンドラーの函に関する節で、こう歌っている（松平千秋訳・岩波文庫）。

「病苦は昼となく夜となく、人間に災厄を運んで、勝手に襲ってくる、ただし声は立てぬ——明知のゼウスがその声を取り上げてしまわれたのでな。」

声を奪われた、無言の病気の到来。たしかに、病気は自分の体内で発生するのではないかのようである。自分とは無関係に、どこか別のところからやってくる

ようではないか。

あの両肩から胸にかけて始まった不快感。何だこれかと思ううちに、それと呼応するように鳩尾のあたりから胸へとこみ上げるように不快な沸き立ちが起こる。そして吐き気。吐くものはないのに胸のあたりから去らず、次の現象へと発展しそうでしきれずにみずから苛立っているような吐き気。あとで読んだ本には、病院到着前の死亡例の多いこと、発作の衝撃のため錯乱状態に陥る者もあることが書かれているが、そうなったかもしれないような不快感がやがて全身に生じ、自分を自分が制止できなくなっていった。

なるほど発作は、私の内部で生じ、内部で広がっていった。しかし、突如、どこからか襲ってきたという感じがまったくないわけではなかった。友人のクルマで高速道路を走行中に発生し三時間ほどかかって病院に到着、宿直の医師が心電図と血液検査から心筋梗塞であることを告げたときは、そんなばかな、と思った。やられたか、と思った。

それ以降の感覚は、いま振り返るとやはり異様であった。簡易ベッドに横たわったまま翻訳のフロッピーはどこそこにあるから友人に渡すよう話していながら、一方では、このままずっと行ってしまうような気もして、それでもよいような奇妙に透明な気分であった。しかしかたわらにいて、心電図の目茶苦茶な動きと私とを見ていた妻の言葉からすると、私はあのとき、自分の意識においてしか事態を感じていなかったことが分かる。思うに、クルマのなかで制止しがたい状態であってなお冷静でいられたのは、無知のせいでもある。日頃より血圧に注意し、災厄が起きるとすれば、脳をやられると思っており、その知識は少しはあった。医者からもらっていたニトロを発作後使用したが効果はなかった。心筋梗塞にはニトロは効かないのであり、もしもそれを知っていて、そこから自己の状態を予感していれば、想像によって病状を心的に増幅する傾向をもつ私はどうなっていたか分からない。危機的状态にありながらその実感がなく、ベッドから出て動きまわる患者もいて、その恐ろしさが本に記されているが、私も結局その一人だった。私の知らぬところで臓器の小さな一箇所が閉塞し全体が危機に陥っていたのだ。そして、病名を知らされ愕然としたが、そのあと、すっと冷やかな気分になっていったのは、どこかで覚悟したこともあるが、医師の処置により身体内部の激

動が徐々に鎮静への道を辿り始めたことも作用している。惑乱が徐々に和らぐとともに肉体の衰えが実感され、横たわるその各部分の弱々しい感覚をとおして自分の肉体をこれまでになくなまなましく感じ、うつらうつらしながら施される処置や人の動きを知覚していた。翌朝、心電図はだいぶ落ち着きを示していたそうだが——非常勤のあの若い医師は朝にはもういなかった——、それからCCU設備のある病院に移され、血管に管を通してPTCAを受けている最中も、脚を動かさぬために両足をベッドに縛られて集中治療室に横たわっていたときも、意識は醒めていた。時々眠りに陥りつつ、夜中に、簡単な仕切りの向こうで、交通事故で意識不明の中年の男性について絶望的な治療がなされている様子を聞いていた。やがて家族が来た。妻か娘の押し殺したような声が、どうしてなの、お父ちゃん、どうして？ と、物いわぬ身体に問うのをじっと聞いていた。

ゼウスが病気から言葉を奪ったということは、病気が不意に、外部からやって来るように襲ってくるということは、どういうことなのか。

なぜ？ どうして？ という、隣の部屋の、あの悲しい、誰にも怒りのぶつけようもない、そしておそらくさまざまの状況のなかでそれぞれの激しさをもって虚空に発せられる問いに比べれば、危機は去っていなかったが生き延びつつある私にはまだ余裕があったかもしれない（しかし生き延びた者の優越という気持ちはなかった）。

それにしても、病名を知らされたときには、どうしてだ、という愕然たる思いを、まず受けとめなければならなかった。不条理な目に会った、と感じた。近代医学の常識をもとに、自分の身体がその内部で生じさせている現象であることは分かっているにもかかわらず。

幼いシュベルバーが納屋の屋根にのぼって、小石を空に投げる場面がある。貧しきユダヤ人町はメシアの到来なしにはこれ以上もう長くはもちこたえられなくなっているのに、いぜんそれを差し控えている神に挑戦してのことである。

目には見えぬが、個々の人間の発する苦悩が集まって巨大な苦悩となったものがあり、それは古代からずっと存在している、という漠としたイメージを私が抱

き始めたのは、四十代の終わりか、五十になってからか。それに似た文はもっと以前に読んでいるはずで、しかも、ルーマニアのカルパチア山脈の麓に生まれパリに移ってフランス語で書いていた哲学者のシオランだったと思いこんでいて、その文をいま確かめようと何冊かの翻訳を開いたが見当らない。間違っただけで記憶したのをもとに自分で勝手なイメージに作り上げたのかも分からない。巨大な、という形容詞にしても、自分でそういうふうな頭に描いてしまったのであろう。

もしかすると、シュベルバーの神のように高いところではなく、もう少し地上に近いどこかに、巨大な苦悩が漂っている。そうしていま、個を超えた肉体というものを想定できるだろうかと思うのだ。人間は死に塵となり土に帰るとすれば、肉体が帰っていった土がその巨大な肉体ということになるのかもしれないが、そのような変化を辿ったのちの姿ではなく、肉体そのものとして古代から持続するものは想像しうるであろうか。

個々人のかかえる苦悩は見えない。個人を超えた巨大な苦悩も見えない。見えないからそのようなものが想定されうる。しかし、肉体は見える。あくまでも個別化されて、見える。だが日々の労苦に、心労に歪められ、いつしか傷つけられ、あるいは、突如何かの暴力で傷を負わされ、場合によっては、突如消滅させられるのは、この肉体ではないのか。人間の成長の輝きを表現するとともに老いを醜さとして露呈する役を負うのもこれだ。目に見えるがために人間の負の面を担わされたこの肉体が、他の何かで象徴されるのではなく、そのまま巨大な何かで存在することはないだろうか。こういう考えにとりつかれているのである。夏の夜、無言の肉体の衝突を聞いたあと、いままたそのような思いを浮かべるのも、やはりシュベルバーの文でへとへとになったせいかもしれぬ。彼は幼いときから、肉体に対しては異様な関心を抱いていた。河原に寝かされた見知らぬ若者の死体の描写もその一つである。あれはなぜあそこに挿入されたのだろうか。

そしてこうして闇のなかに横たわっていると、病気のあのときほどではないが、垂直状態のときと異なり、自分の身体を感じる。このようなことをあれこれ思うのはそのせいでもある。

じっと目をつぶっていると、見えない肉体があるのだ、とふと思いついた。それは、私にとっての、私の肉体、であると。



に冠状動脈の異常が見られたので駆けつけたのだそうである。翌日、担当の医師が前夜の心電図を調べた。ちょっとした異常で心配ないとのことであった。たくさんの患者のモニターのなかで、しかもいつ何が起こるか予告はないきわめて不確定ななかで、夜中に、私の冠状動脈の変化を見逃さないで駆けつけてくださった宿直の看護婦さんたちへの感謝もあって、その夜のことは忘れがたいこととなったのだが、自分の身体の内部が分離して察知されていたということ、病院なら起こりうる事象であるにせよ、自分の内部について自分が感じつつあることが同時に自己とは無関係の場で知覚されていたということ、あとで思い返して不思議に思う。

こうして、自分とのつながりを失っていく自分の肉体のイメージが深まる。しかし私はいぜんとして私の内側からしか物事を見ていないのであり、そのようなあり方を浮かべるのみである。

場合によっては、だれからも見られていないがそこに存在している肉体としての自分、と先に記したが、そのようなことの起こる状況を、乏しい体験から想像してみると、言葉でそう組み立てたときに予感してはいなかったかもしれぬ、不気味な、非人間的な情景が浮かび上がってくるようだ。

前に、この欄で、歩くことについて述べた。

「歩く (gehen)」という動詞どうりのことを行なうことが、通常、きわめて困難であることを書いた。何か考えながら、感じながら、どこかへ、何かのために、人はいつのまにか歩いていて、歩くことにそのとつど無意識にせよ何かが付加されていて、ただ、「歩く」という動詞に撤することは非日常的であることを書いてみた。それを辿っていくうちに、歩くことそのものを止めることが死につながるような歩くということのシーンを、これまでの歴史的な出来事から想像してみたのだった。

肉体についてもそれに似たことを思い描くのであるが、状況により、変容は一挙に生じるであろう。

私という一人の人間の内面や属性とは無関係にされたなかでの肉体。たとえば、群衆のなかにいる私の身体。いや、群衆という連関性すら剥ぎ取られた状態に放置されたときの私の身体、否、一つの肉体。むきだし肉体以外のものではないもの。

社会的意味もすべて奪われた、ただの肉体の集まりにすぎぬものでしかない集団、美と力の表現とされる

ものが、別の場では打ち捨てられ損傷を負い横たわる光景……四夜連続のSHOAHのなかで語られていた証言によると「死者」とか「犠牲者」という言い方すら禁じられている状況での、肉体。

しかしここで足と止めなければならない。

このような、名詞そのものの、文字どおりの姿を追い求める私自身の歩みは、ムージルの『特性のない男』で扱われる「裸の名詞としての」精神から発している。これについては、前に、「歩く」に関する文で述べた。言語学者ハラルト・ヴァインリヒは、私たちは語彙を孤立した状態において見るのではなく、「その切り離された状態から解放し、文脈の関連の中に置き、文脈と共にそれを一つの生活の場の中に置く」という。こうして言葉を孤立させて使わないからからこそ、「語彙は思考をゆがめたりしない」のである、と。

しかし特性のない男は、さまざまな文脈、それに付加されたさまざまな形容詞、「脂ぎった人間性の湯気」から抜き取った「裸の名詞」としての「精神」というものを思い浮かべようとするのであった。自己の特性まで含めて諸々のものが自己から遊離していることを認識する男は、解体する生の全体について厳密に考えようとしているのである。生という不確かなものを厳密に考えるということを試みている。そして厳密さを追求するその過程で、そうした分離し孤立せる概念を、想起せんとしているのである。歴史的過程において人間がさまざまに用いてきた言葉について、その純粹化を求めている。いわば歴史のねじり返しのようなことをしている。

この反歴史的性が、人間の脂ぎった湯気にみちる通常の言語世界に裂目を生み、新たな何かを予感させる。しかしムージルは、一方では、この純化の行き着く先について、次のように特性なき男に語らせるのだ。

「ある思想が君を捉えるということ、を文字どおりに受けとってごらん。君がこの出会いをそのように肉体的に感じる瞬間に、君はすでに狂人の国の境界のなかに入っているだろう。つまり、どの言葉も文字どおりに受けとられることを欲している。さもないと言葉は腐って嘘になってしまう。しかしどんな言葉も文字どおりに受けとってはいけないのだ。さもないと世界は精神病院になってしまう。」

しかしなお精神は純粹を求める。結局は不確実な周

辺を辿るだけの論証や説明ではなくて、一つのそれ自体を求める。意味づけは無用であると。そしてそのような希求が奈落への落下と無縁ではないことは、危険を内にはらんでいることは、文学が描いてきた。

シュペルバーの受けた宗教教育において、精神は純粹であらんとしている。そこでは、肉体はあくまでも「下僕」であり、いや、「道具」であった。過去・未来の時間構造において、現在は通過点でしかなく、「そこを越えるやいなや、気化して無となる」ものでしかないように、現世の肉体は下僕でしかなく、灰となり土に帰るべきものである。このように、現在を、そして肉体を捉えるからこそ、彼らは、彼らに加えられた迫害、苦難の日々を耐えぬくことができたことが予感されるのであるが、しかし精神と肉体の二元論において、そのような二元論の行き着くところとしては当然かもしれないが、しかし不当にも、肉体を「下僕」として、「道具」として捉えることから生じる危険に思いをいたさなければならない。

むろんシュペルバーは、その「下僕」たる肉体に対してどのような無理難題をいってもかまわない、「道具」としていかにそれを扱おうとかまわぬ、とっているのではない。肉体に対する彼の異様な関心については先に触れた。そもそもこの自伝を書こうという気持ちになったのも、上に述べたように、自分の顔を鏡に見てそれが自分の顔ではないと覚えることがきっかけなのだが、自己の肉体については、自分は醜いという感情は少年の彼をすでに苦しめていた。彼はまた幼いときから、自分の肉体だけではなく、他人の顔、とくに歪んだ顔などに対する独特の感度をもっていた。あの辺境の地の小さなユダヤ人町の人間の、貧しい生と肉体について記す彼の文はけっして同情のこもったものではない。むしろ突き放している。しかし突き放してそれで終わりではない。河から引き上げられた若い男の裸の死体のまわりに真夏の蠅が何匹か飛び、男の足の裏が黄色くなっていることにじっと目を注ぐ五歳の男の子は、一方でまた、労働の苦しみにあえぐ肉体を見ていた。描かれるのは、卑小な姿ではない。労苦の像には神話的雰囲気すら漂っている。

大柄ながっしりした男が、農民の毛皮を着て、ばかどかい羊の毛皮の帽子をかぶって、凍った道をゆっくりと歩いてくる。男は肩に軛のように天秤棒をかついでいて、その両端には水のはいった桶がぶらさがっている。「苦しげに呼吸する男の吐く息が、灰色がかっ

た白いもやのように、彼のまえにたちこめている。やっとたどりついて、立ち止まり、奇妙な踊りのような格好をする。右の桶を地面におろすや、両手で、電光石火の早業で軛をはずすと、もうひとつの桶を手に取り反転させて樽に水をあける。」

少年が凍つく冬の靄のなかで影絵のように見るこの水汲み人の姿から、三巻の自伝の第一巻は『神の水汲み人』の題名がつけられている。

少年は怒りを覚えていた。「神が公正であるなら、どうして神は私たちが永遠に神の水汲み人であることを黙って見ていることができたであろうか」と。

少年は天に石を投げる。彼らに約束し、しかしその実行をいまなお差し控えてい神を挑発するために。神が不機嫌な顔を見せたら、そのとき文句をいってやりたいと。地上の人間の歪んだ肉体を見る少年は、虚空に、怒りの石を投げたのだった……

頭は燃え、ぐったりとした四肢がそれぞれにその存在を訴えている。と、突然、ほとんどすべての人がいま首尾よく眠りに入っているということが不思議にも思えてきた。私も眠らなければ。

しかし暗闇は暗闇でなくなっている。すでにカーテンの外が白み始めた。

だが、彼が四歳になる前のある体験が先程から消えないでいた。小さな手が、ウクライナ人の女中の手に導かれてその滑らかな肌を移動していく、「贖罪の日」の白日夢のような場面である。庭の林檎の木の下での出来事で、太陽が照りつけていた。幼い観察者はエロスの惑乱のなかで触覚という最も直接的領域を知る……しかしもうほんとうに眠らなければならない。急に、脳が疲労を覚えだした。

横になっていたという願望、明るくなくても起き上がらず、枕に頭を横たえていたいという欲求。

そうだ、水平状態については、シオランがもっと鋭く、挑発的に書いている。「行動が生じるのは、ひとびとが直立を熱心に守っているからである。だから、行動の弊害に抗議するためには、われわれは屍体の格好を模倣しなければなるまい」と。

蟬の声が鳴りだす。動く人の気配が聞こえだした。目を閉じて闇をつくり、大きく息を吐き出してから、自分の闇のなかに沈んでいこう。(1995.8)



## ◀注▶

(1) Manés Sperber: *All das Vergangene...* (1974; 1975; 1977)

『すべて過ぎ去りしこと……』(鈴木隆雄・藤井 訳, 水声社より出版予定)

(1-2) さまざまな言語の単語が叙述に挿入されている。まずヘブライ語の意味や読み方, 仮名書きについては, わが学部の英文学者・古典語学者の河底尚吾先生に教えていただいた。同じ語を何度も発音していただき,

それを仮名にするが, 河底さんはそのたびに首をかしげる。とくに長音にするかどうかの問題になったが, 一定の線でまとめることにした。

ウィーンにてシュペルバーはロシアのナロードニキなどに関心をもつ。どうしても分からぬ名前などが出てきて, 教育学部ロシア語の長縄光夫先生の研究室をお訪ねした。

(2) 最後のシオランの文は、『苦渋の三段論法』(1952) (及川 馥訳; 1976年, 国文社) より引用。  
〔ふじい ただし 横浜国立大学経営学部教授〕